

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520345

研究課題名（和文） 視点現象の「心の理論」からのアプローチ

研究課題名（英文） A Theory-of-Mind Approach to Empathy-Related Phenomena

研究代表者

山田 義裕（YAMADA YOSHIHIRO）

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：40200761

研究成果の概要（和文）：この研究は、他者の心を読む能力である「心の理論」が私たちのコミュニケーションにどのように作用するのかを視点現象に焦点を当てて明らかにすることを目的としたものである。本研究では、他者の心を読む際や世界を認識する時に私たちが依拠する視点の特性に注目し、情報化時代のコミュニケーション様式の変容は、私たちが依拠する他者視点が時代的に変化していることが一つの要因であるとの仮説を立て、この仮説を視点に関係する様々な経験的事象に照らしてその帰結を探った。

研究成果の概要（英文）：The present research aims to find out how our mind-reading capability, which is referred to as “a theory of mind” in the field of developmental psychology, affects our ways of communication by focusing on empirical data relevant to “the speaker’s empathy,” i.e. the speaker’s point of view. Our hypothesis is that the point of view upon which we depend when we recognize the world has been changing in a radical manner as the information era progresses, which has strong influence on our present style of communication. I have explored consequences of the hypothesis on the basis of empathy-related phenomena.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：心の理論、視点

## 1. 研究開始当初の背景

視点に関する研究は、これまで言語学、心

理学、社会学などの分野で独立に行われてきた。

言語学分野では、久野暁の共感度理論、神

尾昭雄の情報の縄張り理論、田窪行則・金水敏の談話管理システム研究が主だった研究として挙げられる。

心理学分野では、Wimmer & Perner (1983) における誤信念課題を使った幼児の「心の理論」の発達についての研究を端緒に、Simon Baron=Cohen や子安増生らにより、心の理論の経験的・理論的研究が進められてきた。

社会学の分野では、近代から後期近代あるいはポストモダンにかけての超越的視点（あるいは「大きな物語」）の失効が、現代の人間関係やコミュニケーション様式の変化にどのように影響しているかについての研究が、Anthony Giddens（自己再帰性の研究）、東浩紀や大澤真幸（消費社会論、コミュニケーション論）たちによって展開されている。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目標は、これまで視点に関して各分野で独立に進められてきた研究を架橋することで、視点研究の新たな研究領域を拓くことである。

第二の目標は、視点という概念を領域横断的に利用可能なように洗練させることで、言語を媒介とした対人コミュニケーションだけでなく、ノンバーバルな身体的コミュニケーションからネット上のコミュニケーションや公共コミュニケーションまで広義のコミュニケーションを対象とする新たな経験的研究が可能な状況を準備することである。

これらの目標を追求する上で、次の二つを具体的研究課題として設定した。

- (1) 視点表現の使用についての共時的および通時的調査
- (2) 他者視点取得の心的メカニズムの探求

(1)の研究課題の目的は、言語／方言間や異なる地域間での視点表現の使用について調査し、それらを比較することで視点あるいは他者視点取得のメカニズムと言語使用の関係を探ることである。もう一つ、通時的に、すなわち時代の変化に応じて、視点表現の使用あるいはコミュニケーションのあり方がどのように変化してきたかを考察することである。

(2)の研究課題は、乳幼児のコミュニケーション能力の発達や、社会におけるコミュニケーション様式の変化を調査し、それに基づいて、他者視点取得のメカニズムを解明することを目的としている。具体的には、前者については原初的段階の他者認識の発達、後者に関しては超越的視点のコミュニケーションにとって果たす役割を研究の対象とする。

## 3. 研究の方法

上記の目的の達成のために、フィールドワークやネット言説などの調査、および言語学、発達心理学、情報メディア論等の分野の文献調査を行った。

具体的には、標準日本語（東京方言）と琉球方言における視点表現の使用を比較するため、札幌と那覇において質問紙調査を行いその結果を分析した。また那覇においては、それと同時に、琉球方言特有の視点表現の使用が、世代を経て変化している可能性を探るため、20歳前後とその親世代での比較調査も行った。

ネット上のコミュニケーションについては、特に若者のネットにおける言語使用の実態を探るためBBS等のログをデータとして収集し、ごくパイロット的なレベルであるが分析を行った。

文献調査については、同じ「視点」という認知概念を研究対象としながら、これまでほとんど相互の交流が無いまま独自に研究が進められてきた複数の研究分野を架橋することを意図して、文献の収集・整理とレビューを行い、研究の基礎資料を作成した。具体的には、言語使用の研究、発達心理学の研究および社会学、特に情報メディア研究の分野における視点研究の融合を目指して文献調査を行った。

## 4. 研究成果

本課題の研究成果について、経験的研究の側面と理論研究の側面に分けて報告する。報告を開始するに先だって、本研究のスタート地点を明確にするため、本課題を始めるきっかけとなった山田（2003）の基礎研究を簡単に振り返る。

この論考は、生成文法における言語使用の新たな経験的研究の方向を、認知システム（言語機能）と運用システムとの相互関係という観点から探ろうとしたものである。この論文では、久野暉らの機能文法論の枠組みで進められてきた一連の視点現象についての研究を、発達心理学等の心理学諸分野で仮定されている「心の理論」という認知メカニズムを視野に入れて再評価した。具体的には、指示詞や日本語の授受動詞のような直示表現 (deictic expression) の使用には、「心の理論」という認知モジュールが決定的な役割を果たしていることを経験的データに基づき論じた。一例を挙げると、英語の往来動詞 (go-come, take-bring) の使用について、話者が聞き手の方向へ向かう事態を記述する時に、話者の視点が出発点にある go や take ではなく到着点のほうに話者の視点を置く come や bring が使われるという観察がある。Kuno (1987) の提唱する「発話当事者の視点

ハイアラキー」(Speech Act Empathy Hierarchy)に明らかに反した往来動詞のこういった振る舞いは、従来の言語研究では「聞き手への視点の移行」により説明されてきた。しかし、この「視点の移行」という認知作用が一体何なのかは不明であった。この論文は、視点の移行と呼ばれていたものは、まさに「心の理論」という認知モジュールの他者視点取得の認知メカニズムの一つの具現であると仮定して、その経験的帰結を探ったものである。

この研究を一步推し進めることを意図して、本研究では視点表現の使用の実態および変化について、フィールドワークにより調査を開始した。まず、本課題の経験的研究の側面を、調査結果を踏まえながら報告する。

視点表現の使用の実態を探るため、英語の往来動詞の come と同じ視点特性をもつと考えられている琉球方言の「来る」の使用に関し、現在の使用の実態を那覇市内において質問紙による調査を行った(比較のため札幌でも同様の調査をおこなっている)。話者が聞き手に向かって移動する時に「来る」を用いると答えた人は半数で、自分は使わないが聞いたことがあると答えた人も入れると9割以上となる。20歳前後の若者とその親世代の比較も同時に行ったが、「来る」のこういった使用については、有意な差はなかった。沖縄出身でありながら「来る」の使用について聞いたことがないという答えも中にはあることから、この視点動詞の使用が沖縄全域にわたってのものでないことが推測される。今回は出身地域についての詳細な情報は取らなかったため、この点は今後の課題である。

この調査では、授受動詞(やる-くれる)と家族の呼称についての調査も同時に行った。話者が聞き手にモノを渡す時に「やる」の代わりに「くれる」を使うと答えた人は、親世代にはまだいるものの、若者世代で使用すると答えた人は私の調査した範囲では皆無であった。この「くれる」の使用を聞いたことがあると答えた若者は相当数いるものの、若者が自分では使用しなくなっている現在の状況からして、この方言の使用は今後衰退していく可能性が高いと推測される。

日本語の家族の呼称の使用も、その裏で他者視点取得のメカニズムが働いている事象である(具体的には、家族の最年少者への視点の移行)。家族の呼称の使用についての現状について、父母や兄弟をなんと呼ぶかについて質問紙調査を行った。父母の呼称については、圧倒的に親族呼称(お父さん等)を用いているのは従来と変わっていない。今回の調査で目立ったのは、兄弟を呼ぶのに親族呼称(お兄さん等)ではなく名前やニックネームという固有名詞を使用すると答えた若者が多い点である。札幌の調査では、親族呼

称と固有名がほぼ拮抗している。興味深いのは、この二つを(あるいは人称代名詞を)場合によって使い分けている若者がいることである。これについては、後ほど本課題の理論編を報告する際に、多元的自己についての議論の中で再度触れることとする。

今回の調査は、サンプルの数は少なくや抽出法もしっかりとしたものではないため、統計的価値はないが、しかし視点表現の使用の変化を確認するためのパイロット的な調査としては有効なものであると判断している。

次に本課題の理論研究的側面についての成果報告を行う。研究の目的のセクションで述べたように、本課題は、私たち人間の「視点」の特性を明らかにするために、いくつかの分野で独立に進められてきた研究を架橋することで、視点研究の新たなフロンティアを拓くことを目的としている。

言語学の分野における視点研究としては先ほど背景のセクションで述べたように、久野の共感度理論、神尾の情報の縄張り理論、田窪・金水の談話管理システム研究などがあり、それぞれ独自の理論的枠組みの中で、視点に関係した言語現象を分析している。これらの視点研究の中で、本課題にとって重要なのは「視点の移行」という概念である。視点の移行というのは、自分の視点を一時的に他者にあずけ、他者の視点から事態を眺めることである。繰り返すが、この「他者視点取得」という認知メカニズムを支えているのが、「心の理論」という認知システムなのだ。

この他者視点取得という認知メカニズムが言語と独立した認知モジュールである「心の理論」の一部であるという認識が広まり、それが言語研究に応用され始めたのは比較的最近のことである。しかし、他者視点取得の研究は、様々な研究分野でかなり前から始められていた。例えば、自己の認識と言うのは「他者」がその起源であり「他者」からのまなざしの中で育まれるという人間の他者依存的本性について、哲学、社会学、精神病理学、あるいは認知科学の研究において議論が深められている。クーリー(Charles Horton Cooley)の“looking-glass self”、ミード(George Herbert Mead)による主我(I)と客我(me)、アンリ・ワロン(Henri Wallon)の発達研究、ジャック・ラカン(Jacques Lacan)の「鏡像段階(mirror stage)論」、モーリス・メルロー＝ポンティ(Maurice Merleau-Ponty)の他者の知覚の発達過程の研究、認知心理者ゴードン・ギャラップ(Gordon G. Gallup, Jr.)のマーク・テストを利用した自己鏡像認知の研究などがその代表的研究であろう。

私たちの自己認識の芽生えを、乳幼児の発達初期の原初的段階に焦点をあてて考えてみよう。乳児と身近な他者(例えば母親)と

のコミュニケーションは、まずは「舌出し」やクーイングのやりとりから、身体の動きの同調などの共鳴動作へと進み、生後二か月ともなると、「まなざし」や「微笑み」で意図的にコミュニケーションをとる兆しがでてくる。例えば母親が見つめると見つめ返すようになり、微笑みかけると自ら微笑みを返すようになってくる。岡本（1982:50-56）は、こういった「目の共有」や「微笑の共有」を通じて、乳幼児とお母さんをはじめとするまわりの大人との間にその後のコミュニケーションや対人関係の基盤となる「情動の共有」、すなわちよろこびを分かちあいがあっていくと述べている。Baron-Cohen（1997）らの心の発達理論研究では、こういった「見る-見られる」という二者間の「目の共有」は、相手の視線を追って第三者に注意を向ける「視線の共有」へと発達し、この「共同注意」（shared attention）と呼ばれる相手の視線を追いながら相手の見ている対象へ目を向ける能力は、さらに次の段階で相手の心を読む認知能力である「心の理論」へと発達すると仮定されている。人の心を読む能力である「心の理論」が発達する時期は、4歳以降というのが、誤信念課題を使った実験により、今のところ定説となっている。

心の理論という認知システムは、他者の心を読むだけでなく、私たちが自己の存在や外の世界を他者の目を借りて認識するための心的メカニズムとしても機能している。これが幼児期のある段階で獲得され、それ以後私たちはこの他者視点取得の能力をフルに活用して自己や世界を認識することになる。しかし、他者視点取得は、いつも自覚的に行われているわけではない。鈴木（1973）が発見した、家族呼称の使用の裏にある「家族の最年少者」に視点を移行する認知作用は、本人には全く自覚がないわけであるから、完全に無意識のレベルで機能しているはずである。こういったことを踏まえると、心の理論あるいはその前段階の他者視点取得は、無意識的な認知メカニズムと考えるのが自然である。

原初的段階の他者関係やそれに基づく対面コミュニケーションにおいては、「他者」とは母親に代表される身近な他者である。しかし私たちは、言語を習得し社会の一員へと成長するにつれ、目の前の身近な他者だけではなく、「社会の目」とでもいうべき、超越的な他者へと視点を移行して世界を認識し始める。大澤真幸は、ジャック・ラカンの「大文字の他者」を援用して、このような超越的視点を「第三者の審級」という概念として洗練させている。第三者の審級とは、例えば政治イデオロギーのように規範や秩序を担保する超越的な審級のことである。何が第三者の審級として機能するかは、時代や社会の特性により異なる。前近代の村社会であれば村

の掟がそれにあたるだろうし、近代社会においては、例えばマスメディアが私たちが視点をあずける先となるであろう。他者視点取得自体は無意識的な認知メカニズムであるので、超越的審級への視点の移行も無自覚に行われる。マスメディアの報道を、たとえそれがプロパガンダである場合にも、大衆が疑いも持たずに信じて従ってしまうのは、視点の移行が私たちのコントロールの効かない形で作用してしまうからである。

近代から近代後期（あるいはポストモダン）へ向けて、社会における超越的審級の機能に大きな変化が起こっていることが、メディア研究や消費社会論などの研究分野で盛んに議論されている。すなわち、近代においてリアルで有効であった超越的審級という概念装置は、近代が終わりに向かうにつれてその効力を失いつつあるというのである。これについて、例えば、東浩紀はポストモダンの消費形態（データベース消費）の特徴は「大きな物語」（リオータル）が凋落した結果なのだと主張し、大澤真幸はポストモダンの社会の他者関係やコミュニケーション様式の変容を、第三者の審級の失効に起因するものだと論じている。

超越的審級の失効が人間関係やコミュニケーション様式にどのように影響するかを、現代日本の若者のコミュニケーションを例に考えてみよう。若者のコミュニケーション様式やそれを支える人間関係の変容については、社会学者の浅野智彦、土井隆義、鈴木謙介、辻大介らが精力的に調査・分析を行っている。現代日本の若者のコミュニケーション作法として、辻大介は「てゆうか」「みたいな」に代表されるぼかしことばの多用や、目上に対する敬語と「タメロ」の混在は、親密さを維持するための配慮の結果と分析する。また土井隆義は、教室内コミュニケーションでそれぞれの生徒が強迫神経症的に常に空気を読み続けるのは、相手を傷つけたり衝突するのを慎重に避け、他者に配慮しながら関係を維持するためなのだと主張する。

こういった新たなコミュニケーション作法の出現は、現代の人間関係の変化とアイデンティティの変容が大きく影響しているものと思われる。

現代社会における人間関係の変化が、どの点でどのようにコミュニケーションに影響したのであるだろうか。土井隆義は、若者が懸命に空気を読むのは、彼が「優しい関係」と呼ぶ、ある意味「予定調和的」世界を維持するためであるという。教室は、かつてのように自然と人間関係が立ち上がる場ではなく、そこにいる人間がコミュニケーションによって必死に維持していかなくてはならない空間になっている。なぜこういった変化が起こったのか。一つの仮説として、近代後期の超

越的審級の失効が考えられる。かつて教室や会社という制度の中で威力を発揮していた規律や階級関係が、超越的審級の凋落に合わせるようにリアリティを失っていく。こういったコミュニティの掟の失効を埋め合わせるかのように、その場その場で相手を過剰に配慮するコミュニケーション様式が前景化していると考えられる。

では、私たちのアイデンティティのあり方は、近代から現代へとどのように変化しているのだろうか。近代においては、私たちの生活の場は家族のような包括的な関係の場に限定されていた。しかし、都市化や郊外化を通じて、私たちの親密的関係の場は、次第に離脱の自由が認められるものへと移っていく。浅野智彦は、こういった親密圏のあり方の変化が、私たちの親密的関係を「包括的コミットメント」から「選択的コミットメント」へと変容させたと分析している。さらに、このような関係性の変化により、私たちのアイデンティティのあり方も大きく影響を受けることになる。近代の自律した主体のイメージに由来する「唯一の本当の自分」から複数の「私」を状況によって切り替える「多元的自己」へと現代の若者のアイデンティティは変化しつつある、というのが浅野の結論である。

本研究で行った調査の中で、家族を呼ぶ時に複数の呼称を使い分ける例が出現しているのは、アイデンティティが多元化していることを支持する経験的事象と考えることもできる。

他者視点取得というのは、私たち人間の無意識的な認知特性、心の理論の一部である。私たち人間は、全く無自覚に他者の視点を借りて世界を眺めるのだが、どこへ視点をあずけるかは、その人が生きてきた社会や文化の文脈により大きく異なる。視点についてのリアリティは、その社会その時代の世界観を規定し、他者関係のありかたに影響を及ぼし、コミュニケーションの様式を変える。コミュニケーション様式や他者関係の変容を、視点という観点から通時的および共時的に、より広範囲にわたって考察することが今後の課題である。

Baron-Cohen, Simon (1997) *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*.  
The MIT Press

Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax*.  
Chicago University Press.

鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書  
山田義裕 (2003) 「生成文法と語用論---共感度研究の再評価」 *The Northern Review*  
No. 30.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 山田義裕、まなごしを贈るーポスト虚構の時代における他者との出会い(後編)、*The Northern Review*、査読無、No. 37、2011, pp.11-45
- ② 山田義裕、まなごしを贈るーポスト虚構の時代における他者との出会い(前編)、*The Northern Review*、査読無、No. 36、2010, pp.17-30

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山田 義裕 (YAMADA YOSHIHIRO)  
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授  
研究者番号：40200761

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし